

<前回>

オリエンテーション

- A. テーマ：「宗教改革から近代キリスト教思想へ」
- B. 目的
- C. 到達目標
- D. 確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火3・水5）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

- E. 授業スケジュール

<導入>

A. 「キリスト教思想史研究」に向けて（「キリスト教講義」より）

- 2. 思想とは何か？ なぜ思想なのか！

生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）としての思想。

思想は暗記科目ではない。

- 3. 思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。

→ キリスト教思想は聖書から始まる。

- 4. 思想の歴史性 → 思想史のアプローチの必要性

B. 近代：哲学とキリスト教思想

哲学的思惟と聖書翻訳の問題

一 問題

二 近代哲学と翻訳——シュライアマハーの場合

三 ベンヤミンとリクールの翻訳論

四 聖書翻訳と適応の原理

1. 宗教改革と近代

<昨年度後期の復習>

(1) 宗教改革

- 1. プロテスタントとは何か

宗教改革はプロテスタント教会の歴史的出発点であるが、宗教学的に考えた場合、「プロテスタント」に関しては、次の三つの意味を区別することができる。

- ・原理としてのプロテスタント（宗教史の構成要素）
- ・歴史的プロテスタント（教派・組織として）
- ・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）

→ この意味における「プロテスタント時代」は終了した。

- 2. 宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517年10月31日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「95箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。これは、中世後期には、ルターの問題意識に共鳴する思想状況が広く存在していたことを意味しており、宗教改革はルター個人の活動に還元できない歴

史的動向と言わねばならないだろう。 → 中世の文脈における宗教改革、中世の諸伝統を無視しては宗教改革は理解できない。

3. 宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に関連し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。思想としての宗教改革の核心は何か。

4. 人間は何によって救われるのか？

- ・行為義認：人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。 Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。
- ・問題は人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑に至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。 cf. 贖宥の論理
- ・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによるのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。 cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。
- ・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。
- ・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することになり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わらないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。
- ・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

5. 理念と現実の緊張：三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

Q：農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

「最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきってしまった。共同体の生活は幾重にも沈滞したままだった。「キリスト者の自由」にふさわしく成熟してない人々

は、ローマの政治機構の崩壊とともに、すべての教会的な支えを失ってしまったのである。ルター派の陣営においてさえ、多くの人々が、そもそも宗教改革によって人間はどれほど立派になったのだろうか、と自問する始末だった。芸術の世界において——音楽は別として——貧困化したことも見逃せない。」(ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち パウルからカール・バルトまで』新教出版社、226頁)

(2) 宗教改革の歴史的位置

6. 中世との連続性と断絶：「歴史的連続性の四つの線」(キュンク、199)

- 1) 修道院のカトリック的敬虔。ルターは「カトリック的信仰から引き継いだ最高のものを守り抜いた」「義認論」「ルターの修道院の上長で改革的な傾向のあった、ヨハネス・フォン・シュタウピッツ」
- 2) 中世的な神秘主義。「神秘家のタウラーを最も偉大な神学者の一人と呼び、彼を推薦しつづけた」「中世の神秘主義の伝統的な遺産」
- 3) アウグスティヌス神学。「ルターは、中世の神学の基本的な構成要素の一つ、つまりアウグスティヌスの神学との結びつきを保った」。「三位一体論」「キリスト論」「恩寵の神学」
- 4) オッカム主義。「オッカムやビールからルターの義認論に通じる道」
金子晴勇『近代自由主義思想の源流——16世紀自由意志学説の研究』創文社、1987年、
『ルターとドイツ神秘主義——ヨーロッパ的霊性の「根底」学説による研究』
創文社、2000年。

7. 宗教改革のプログラム

1520年。宗教改革の綱領文書の成立。

説教『よきわざについて』(信仰とわざの関係)、『キリスト教界の改善について ドイツ国民のキリスト者貴族に与う』(教会改革の包括的なプログラム、万人祭司制、修道的生活・祭司独身性・贖宥などの廃止)、『教会のバビロン捕囚』(サクラメント論)、『キリスト者の自由について』(義認理解の総括)。

マルティン・ルター『宗教改革三大文書 付「95箇条の提題」』深井智朗訳、
講談社学術文庫。

8. 宗教改革のパラダイム(キュンク)

- 1) 神学の諸概念の変化(義認、恩寵、信仰、律法)あるいは放棄(アリストテレス的な自然学・形而上学の諸概念)。
- 2) 伝統的規範・基準の移動：聖書、公会議、教皇の勅令、理性、良心。
- 3) 伝統的な諸概念に基づくサクラメント論などの諸理論全体が、スコラ学的方法論(思弁的・演繹的)が動揺。

↓

「聖書的・キリスト中心的な新しい神学概念」へ

- 1) 神の新しい理解。それ自体の神ではなく、われわれのための神。
 - 2) 人間の新しい理解。義人であり同時に罪人。
 - 3) 教会の新しい理解。信仰者の万人祭司制を基礎とする、信仰者の共同体としての教会。
 - 4) サクラメントの新しい理解。自動的に作用する儀式ではなく、キリストの約束と信仰のしるし。
- ・主体性論、神の、そして人間の。

(3) 宗教改革から近代世界へ

9. 市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム
「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。
聖書の近代語への翻訳 → 西欧国民文化の基礎
10. 近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤
宗教改革の精神 → 自立した個人と自由・平等（理念）
西欧的な政治と経済のシステム
近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）
近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）
近代科学（マートン・テーゼ）
11. 「聖書のみ」（聖書主義）の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要であった。
聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）
12. 近代的な世俗性への二面的な関わり
17 世紀までの過程の中で、近代世界の基盤（議会民主主義、資本主義、近代科学などの近代のサブシステム）は形成され、その背後に宗教改革的な精神性の作用が確認できる。しかし、一端成立した近代は、そのいわば母体であるキリスト教から自立し、それ自身の原理で動き始める（自律性、聖俗革命）。ここに、近代とキリスト教の二面的関係が成立する。とくに、18 世紀以降、近代精神はキリスト教への批判を強め（啓蒙主義）、キリスト教はそれへの対応を求められることになる。
18 世紀以降の動向は次のようにまとめられる。
 - ・近代性への適合 → 世俗主義の台頭と譲歩
合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）
 - ・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

(4) 翻訳文化とキリスト教

13. 原典・原語主義：近代の人文学は、原典主義を基本にする。これは、「知の歴史性」を自覚した歴史主義を基盤にしている。
↓
聖書研究は、ヘブライ語とギリシャ語の原典でなされる。
14. 近代人文主義 1：ウルガタ（ラテン語聖書）から、原典に帰れ。
15. 近代人文主義 2：聖書の近代語訳（英語、ドイツ語、フランス語など）の推進。
cf. ヒューマニズムの多義性
16. 宗教改革・聖書主義のもたらしたもの：「聖書のみ」のスローガンの実現過程＝近代国民文化形成過程（翻訳・近代語・印刷出版・教育）
ルター訳聖書、欽定訳聖書：近代語、国民文学の形成へのインパクト
↓
ヨーロッパ文化理解の鍵としての近代語訳聖書
17. The two greatest influences on the shaping of the English language are the works of William Shakespeare and the English translation of the Bible that appeared in 1611. The King James

Bible ---named for the British king who ordered the production of a fresh translation in 1604
--- is both a religious and literary classic. (McGrath,1)

「英語文化の形成に大きな影響を与えてきた聖書の名句」(寺澤、i)

18. 創造活動としての翻訳。翻訳は、それ自体が新しい創造活動である。
19. 翻訳なしに宗教は可能か。生きた宗教は土着化(文化に受容されそこに根ざすこと)しなければならない。→外来宗教の土着化は、「翻訳」を不可欠の構成要素とする。
20. 翻訳された聖典は、その宗教の新しい創造的な形態となる。仏典の漢訳。
21. アントワーン・ベルマン『他者という試練——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房。

「第一章 ルターあるいは礎としての翻訳」

「聖なるテキスト(Heilige Schrift)のドイツ化すなわち Verdeutschung を目指した」、「良いドイツ語(gutes Deutsch)で書かれたテキストを信者のコミュニティに供すること」

「良いドイツ語とは民衆のドイツ語」「自分自身のドイツ語、すなわち高地方言(Hochdeutsch)で訳すこと。だが同時にその翻訳過程を通じて、一地域言語にすぎぬそのドイツ語を全国共通のドイツ語へと、一種の共通語へと高めること」、「一般化された民衆言語」。

「ルター訳聖書の意義」「高ドイツ語を、何世紀にもわたって通用するような書かれたドイツ語の媒体へと仕立て上げた」、「宗教改革者」であると同時にルターはそれ以来、作家、言語の創造者とも見なされるようになる」。

「爾後ドイツは、宗教的・政治的にというばかりか文学的にも、ルター以前とルター以後に分かたれることとなる」。

「もしわれわれが翻訳家民族であるとするならば、われわれの本性とはいったい何か」、「ドイツ性 Deuschheit」

22. 「Theos」の訳: deus、God、デウス、神→既存の用語と新しい造語、あるいは音訳。
23. 「宣教師が試みた翻訳のなかで問題になったのは、キリスト教独自の概念をどのような日本語であらわすか、という点であった。ザビエルたちは、はじめ根本仏「大日如来」とキリスト教の神との超越性という類似点に着目して、唯一絶対神を「大日」と呼んでいたのだが、仏僧との議論の過程でキリスト教の教義のうえで見過ごすことのできない相違点、すなわち大日如来は万物の創造主ではないということ、仏教の世界にはイエス・キリストの受難が欠落していることに気づき、「大日」の使用を禁止する。代わりに選ばれたのは「デウス」というラテン語からの音訳語であった。」(米井、20)

愛: 御大切

「キリシタンの日本語研究と翻訳の試みが刻印されたキリシタン文献は、日本語史の研究のうえで大きな可能性をもっているといえるだろう。」(25)

24. 日本語の「神」は、God の翻訳語として定着する過程で、日本語の「神」の意味内容を変容させた。

<参考文献>

1. ルター 『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
2. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
3. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館、『科学と宗教』教文館。
4. 金子晴勇、江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
5. 徳善義和『マルティン・ルター——ことばに生きた改革者』岩波新書。

6. 日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。
7. 踊共二編『記憶と忘却のドイツ宗教改革——語りなおす歴史1517-2017』ミネルヴァ書房。
8. 永本哲也ほか『旅する教会——再洗礼派と宗教改革』新教出版社。
9. 深井智朗『プロテスタンティズム——宗教改革から現代政治まで』中公新書。
10. 寺澤芳雄編著『名句で読む英語聖書——聖書と英語文化』研究社。
11. 柳父章『「ゴット」は神か上帝か』岩波書店、『翻訳の思想』平凡社。
12. 米井力也『キリシタンと翻訳——異文化接触の十字路』平凡社。
13. Alister McGrath, *In The Beginning, The Story of the King James Bible and How It Changed a Nation, a Language, and a Culture*, Anchor Books, 2001.
14. 鈴木範久『聖書の日本語——翻訳の歴史』岩波書店。
15. 上智大学キリスト教文化研究所編『日本における聖書翻訳の歩み』Lithon。
16. 安西徹雄／井上健／小林章夫編『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社。
17. 土井健司監修『1冊でわかるキリスト教史——古代から現代まで』日本キリスト教団出版局。